

- 敵(一八八二年)の主要な登場人物、強力な社会的グループに対して闘っている孤独な人。
- 26 Francisco Ferrer (1854—1909) スペインの自由思想家、自由の教育訓練システムの創案者、カトリック教会から憎まれ、教会によって革命的陰謀に荷担したと自白を強いられる。一九〇九年に、モンフィク要塞の中で銃殺に処せられる。
- 27 Max Baginsky (1864—1943) ドイツ社会民主党の黨員、ついでアナキストとなり、一八九三年にアメリカ合衆国に亡命する。
- 28 Christian Cornelissen (1864—1943) オランダの絶対自由主義的社会主义者、ドメラ・ニウヴェンフュイスの友人で協力者、彼とともに新聞「万人のための法」を編集する。彼の国におけるサンジカリズムとゼネラル・ストライキの理論家で組織者、フランスに亡命し、生涯を終える。そこで彼は、サンジカリストの新聞に協力する。
- 29 I. I. Samson 一九〇三年のゼネラル・ストライキ期間中活動的であった、オランダのアナキズム普及者、一九〇五年に新聞「自由な共産主義者」の編集者、ずっとのちに社会党の黨員となる。
- 30 傍点の部分がエマ・ゴールドマンの修正を要約している。(ポール・ドレザルの注記)
- 31 Rudolf Rocker (1873—1958) ドイツのアナキスト哲学
- 32 者、歴史家。アメリカ合衆国で死ぬ。特に、「ロシア国家共産主義の破産」(ドイツ語、一九二二年)の著者。
- 32 Charles Malato (1857—1938) アナキスト著作家、特に「アナーキーの哲学」(一八八九年)の著者。Paul Reclus エリゼ・ルクリュ(一巻三三三ページを見よ)の息子。
- 33 Luigi Fabbrì (1877—1938) イタリアのアナキスト著作家であり闘士。「独裁と革命」の著者。
- 34 《独裁》という言葉。
- 35 Jules Guesde (1845—1922) アナキストであったのち、フランスへのマルクス主義の導入者となった、社会民主主義の指導者。Georges Plechanoff (1856—1918) 亡命マルクス主義者となった、ロシアの民衆主義者。ロシアへのマルクス主義の導入者、レーニンの師であり協力者。一九一七年にボリシェヴィキによる権力奪取を非難するため、レーニンから離れる。Henry Hyndman (1842—1921) イギリスへのマルクス主義の導入者であったのち、労働党路線の創始者。Philippe Scheidemann (1864—1935) 一九一九年にドイツの社会民主主義者の総理大臣。Gustav Noske (1868—1946) 右翼の社会民主主義者。一九一八年にキールの知事。一九一九年初め人民委員反革命評議会に入る。のちに軍事大臣、戦艦の革命運動の抑圧を組織する。

エミール・アンリ 1872—1894

エミール・アンリ(一八七二—一八九四年)は、他のアナキストのテロリストたちとは反対に、知識人であった。彼は、J・B・セー校で給費生として輝かしい勉学の目を送る。そこで教師の一人は、「人の出会いうる最も誠実な、完全な子供」として彼を描いている。この教師は、アンリに理工科大学学生の制服をぜひとも着せたいと熱望していた。しかし、彼は、「軍人にならないうために」それを拒否した。

彼の父、フォルチエネ・アンリは、パリ・コミュニケーション派に加わって闘った。欠席裁判で死刑を宣告された彼は、敗北に引き続いた弾圧からのがれるのに成功し、スペインに亡命し、そこで二人の息子が生まれる。彼は、休戦のあと、やっと一八八二年にフランスに戻る。のちに彼は、新聞「アン・ドオール」に寄稿する。

一八九四年二月十二日、午後九時、一人のプロンドの青年がサン・ラザール駅にある、カフェ「テルミニユス」に入った。空いていた小円卓に坐ったアンリは、外套のポケットから爆薬

を詰めた小さな白い鉄の鍋を急にとりだし、それを空中に投げた。それはシャンデリヤにぶつかり、爆発し、いくつかの大理石のテーブルともいっさいのガラスを粉々にした。みなわれ先にと逃げた。二十人ばかりの負傷者がで、その一人は傷がもとで死にいたった。

エミール・アンリは逃げだし、一人の警官とカフェの給仕一人に追われる。さらに一人の鉄道員が彼らに加わり、アンリはその鉄道員を撃つ。しかし撃ちそこなう。いくらか離れたところで、彼は捕えられる前に警官に重傷を与える。

重罪裁判所の審問で、彼は峻烈な応酬をする。

重罪裁判所の裁判長——あなたは……われわれが今日血にまみれているのを見る……その手を延したのだった。

エミール・アンリ——私の手は血にまみれている、あなたの赤い法服のように。

彼は陪審に対して陳述をするが、以下はその抜萃である。

……私がアナキストになったのはごく最近です。私が革命運動に身を投じたのは、やっと一八九一年の半ばころになってからのことです。それ以前は、私は、現行の道徳が完全に染みこんだ環境の中で暮らしていました。私は、祖国の、家族の、権威の、所有の原理を尊重し、それを愛しすらするのを慣わしとしていました。

しかし、現代の教育者たちは、あまりにもしばしば、一つのことを忘れていきます。それは、生活は、その開い、その幻滅のゆえに、その不正、その不安のゆえに、秘密をあばくものとして無知な人々の蒙を啓き、彼らに現実を直視させる、ということなのです。それが、すべての人々の上にも見られるように、私の上にも起きたのでした。人々は私に、生活は気楽なもので、利口な人、精神的な人には惜しげなく開かれている、といました。経験は、破廉恥な人のみが、卑屈な人のみが、宴会でよい席を占めうることを、私に教えました。

人々は私に、社会制度は正義と平等とにもとづいてゐる、といました。私は、嘘とペテンをしか私の周りに認めなかった。毎日、私から幻想がはがれていった。私がいったいたるところで、私は、ある人々の下には同じ苦しみがあり、他の人々の下には同じ欲びがあること、証人となったのでした。私は、人々が私に尊重する

ように教えた偉大な言葉、名譽、献身、義務は、最も恥ずべき破廉恥を覆い隠す仮面でしかないことを、ほどなく理解しました。

すべてを欠いている人々、労働者たちの労働の上に巨大な富を築いた工場主が、誠実な紳士でした。いつも賄賂に向けて手を延ばしている代議士や大臣が、公衆に身を捧げているのでした。七歳の子供たちに向けて新式の銃を試している将校が、その義務をよく果たしたのですし、議会の中では、議長が彼に祝辞をのべるのでした。私が見たすべては、私を憤激させました。私の心は、社会組織の批判に集中したのです。その批判は、いくたびも繰返して行なわれるようになりました。私は、私が犯罪的であると判断した社会の敵になった、といえれば私は十分です。

社会主義に惹かれた時、私はほどなくこの党派から離れることになりました。私は、第四身分(プロレタ)の登録された軍隊の一員であるには、あまりにも深い自由への愛、あまりにも強い個人的發意への尊重、あまりに激しい画一化への嫌悪を抱いていました。もとより私は、社会主義は、実際には、現行秩序を何一つ変えないと考えていました。それは、権威主義的な原理を維持していますし、この原理は、いわゆる自由思想家たちがそれについていいうるところとは違って、優越した力への信頼の古くさい名残りでしかありません。

……われわれがブルジョアジーに対して宣言した容赦

のない戦いの中で、われわれはいかなる容赦をも要求してはいません。われわれは死を与えますが、またわれわれは死に耐えなければなりません。それが、私があるあなたの判決を無頓着に待っている理由です。私は、私の頭

があなた方が切る最後のものではないことを知っています。……あなた方は、われわれの死者の血なまぐさいリストに、ほかの名をつけ加えることでしよう。

シカゴで吊され、ドイツで斬首され、ヘレス(スベ)で絞首され、バルセロナで銃殺され、モンブリゾン(アラ)でパリでギロチンにかけられた、われわれの死者は数多くいます。しかし、あなた方は無政府思想を破壊することはできなかつた。その根は深いのです。無政府思想は、衰微する腐敗した社会のただ中から生まれました。それは、既成秩序への激しい反動です。それは、現在の権威主義を打倒しにくる、自由と平等の渴望を代表しています。それは、いたるところにあります。それは、馴らしえないものです。それは結局、あなた方に打ち勝ち、あなた方を殺すでしょう。

コンシエルジュリ(パリ裁判所)長官への手紙

長官どの。

〈一八九四年二月二十七日〉

今月十八日の日曜日、あなたが私の独房を訪問された際に、あなたは私と、アナキストの思想について、まこ

とに親密な、討議をなさった。

あなたは、あなたにとっては新しい角度でわれわれの理論を知ること、大変驚いた、と私にいわれた。そしてあなたは、アナキストの仲間たちが望んでいることをよく理解するために、われわれの会話の要約を、あなたに書いて示すように、私に要求された。

現行社会生活のあらゆる現われを分析し、医師が病人の身体を診察するようにそれらを研究し、人間の幸福に反するのでそれらを非難し、それらのかわりに、旧社会を築いているものとはまったく反対の原理にもとづく、まったく新しい社会を作りあげる、そうした理論を詳述しうるには、数ページでは足りぬこと、長官、あなたはそれをたやすくおわかりになりました。

しかも、私以外のものが、あなたが私にするよう望まれたことを、すでにしております。クロボトキンの著作、ルクリュの著作、セバスタン・フォールの著作が彼らの思想を「のべていますし」、可能なかぎり、それを発展させています。

ルクリュの『進化と革命』を、ビョートル・クロボトキンの『アナキストの道徳』、『叛逆者の言葉』、『パンの獲得』を、セバスタン・フォールの『権威と自由』、『機械の使用とその結果』を、グララウの『瀕死の社会とアナキー』を、マラテスタの『農民の中に』を読まれるように。さらに、十五年来、次々と発行され、研究しない状況が著者たちに示唆したものにしてがって、そ

それぞれが新しい思想を發展させた、数多くの小冊子を、無数の宣言を読まれるように。

それらすべてを読まれるように。その時、あなたは、ほとんど無政府思想にもとづいた判断を心に抱くことができましょ。

しかしながら、無政府思想が、回教徒によるコーランと同じように、その信奉者によって尊ばれる、非の打ちどころのない、論議の余地のない教義、ドグマであると信じないよう気をつけられるよう。

そうではない。われわれが要求する絶対的な自由が、われわれの思想を絶えず發展させるのですし、(異なる個人の頭脳のままに)新しい地平に向かってそれを高め、あらゆる規制、あらゆる法典作成の偏狭な枠の外にそれを投ずるのです。

われわれは「信者」ではありません。われわれは、ルクリュにもクロボトキンにも、屈服することはありません。われわれは彼らの思想を討論します。それがわれわれの頭脳の中で共感の印象をひろめる時、われわれはそれを承認します。しかし、それがわれわれの中で何一つ感動させないなら、われわれはそれを拒絶します。

われわれは、ゲードがそれを信じなければならぬと、いったから一つのことを信じている、そしてその内容を討議することが冒瀆である教理問答集を持っている、集産主義者たちのような、盲目的信仰を抱いているどころではありません。

下さい)を試してみることが必要なのではなく、二つの邪悪の芽を破壊し、社会生活からそれらを根絶させることが必要なのです。

それが、アナキストたち、われわれが、個人的所有を共産主義によって、権威を自由によって置きかえたいと願っている理由です。

したがって、もはや所有の証書も支配の免許状もありません。絶対的な平等があるばかりです。

われわれが絶対的平等という時、われわれは、すべての人間が同じ頭脳、同じ肉体的素質を持つ、と主張するのではありません。われわれは、頭脳の、肉体的能力の間にこの上ない大きな相違があることを、よく知っています。それはまさしく、人類に必要なものであるすべての生産を実現する、力働の多様さですし、われわれは、アナキスト社会における競争心を保つのに、それをあてにしているのです。

そこに、技師たちや土方たちがいること、それは確かなことですが、しかし、一方が他方に対して何らの優越性もなしに、です。なぜなら、技師の仕事は土方の協力なしには何一つ役に立つものではないでしょうし、逆もまた真だからです。

各自は、彼が営む職業を選択することは自由なので、本性が各自の中に植えた性向(よい生産の保証)に拘束なくしたがう人々しかもはやいなくましょ。

そこで、一つの問題が提起されます。怠け者はどうな

それで私は、いくつかの点で私のものとは違った観点を持つている他の仲間たちをかり合いにすることなく、私、私が無政府思想について理解しているものを、簡潔に素早く、あなたに述べてみようと思えます。

あなたは、今日、社会制度がある、その証拠に各自がそれに苦しんでいる、ということに異議を唱えはなさいませぬ。いつもたえず飢えを知っている、パンも住居もない流浪する人から、食うや食わずの人の叛逆をつねに恐れて消化を妨げられている億万長者にいたるまで、人類すべてが苦しみを経験しています。

よるしい!ブルジョア社会はいかなる基礎にもとづいているのでしょうか?その必然的帰結でしかない、家族の、祖国の、宗教の原理を考慮に入れなければ、われわれは、現在の状況の二つの石のアーチ、二つの基本的原理は、権威と所有である、と断言することができません。

私は、その点についてこれ以上詳述しようとは思いません。われわれが耐え忍んでいるあらゆる害悪が、所有と権威とに由来していることを証明するのは、私には容易なことです。

貧困、盗み、罪、売淫、戦争、革命は、それら二つの原理の結果でしかありません。

したがって、社会の二つの基礎がわるいのですから、ためらうことはありません。害悪を移動させることにしな役立たない、たくさんの姑息な手段(社会主義を見て

のでしょう。各自は働くことを望むでしょうか?

われわれは答えます。いかに、各自は働くことを望むだろう、その理由はこうだ、と。

今日、労働時間の平均は十時間です。

多くの労働者たちが、絶対に社会に無用な仕事に、特に陸軍と海軍の軍備に従事しています。多くがまた失業の憂き目を見えています。そのことにさらに、少なからぬ数の壮健な人間たち、兵士、僧侶、警官、司法官、役人、等々が何一つ生産していないことをつけ加えてみて下さい。

すると人は、何らかの仕事を生産することのできる百人のうち、ただ五十人のみが、社会に真に有用な努力を供給していると、誇張したと非難されることなく、断言することができます。すべての社会的な富を生みだしているのはそれらの五十人なのです。

そこから、もし全員が働いたら、労働時間は、十時間であるかわりに、単に五時間に短縮されるであろうという、演繹が生まれます。

さらに、現状では、人類の需要に必要な総額よりも、工業製品は四倍も多く、農業生産は三倍も多いこと、つまり、浪費やその他の多くの理由がその生産過剰を台なしのものに仕なかつたとしたら、三倍も数多くの人々が、衣食住暖を得られた、一言でいえばすべての欲求に満足を与えられたら、考えてみて下さい。

(この製品統計を、あなたは小冊子『土地の製品と工業

の製品』の中に見出されましよう。)

以上のことから、したがってわれわれは、次の結論を引き出すことができます。

各自が共同の仕事に協力するであろう、そして、消費を法外に超過することのない生産だけで満足するであろう(消費に対する生産の過剰は小規模の備蓄となるはずの)社会は、その健康なメンバーである各自に、二、三時間の、おそらくはそれ以下の、努力をしか要求することのないものでしょう。

その時、それほどさやかな労働量を提供すること、誰が拒絶するでしょうか？ 全員から軽蔑され、寄生者とみなされる恥を忍びながら、誰が生きていることを望むでしょうか？

……いつも相携えて歩む所有と権威は、人類を奴隷のままでおくために、相互に支え合っています！

所有権とは何でしょうか？ それは自然な権利でしょうか？ あるものが何も口にしない時にあるものが食べられているのは、正当なことでしょうか？ 否、自然は、われわれを創造しながら、相似の器官でわれわれを作り、金融資本家の胃と同じ満足を求める人足の胃を作ったのです。

しかしながら今日では、一階級が、肉体のパンのみならず、精神のパンをも他の階級から奪って、すべてを独占しました。

そうです、人が進歩の、科学の、と呼んでいる世紀に

でしょう。

もし、驚くべきことに、誰かがそれでも彼の兄弟たちへの協力を拒絶しようとしたとしても、病人でしかありえないこの不幸な男を養うことは、彼を打ち負かすために立法者や司法官や警官や看守を維持するよりは、いつも安くつくことでしょう。

ほかの多くの問題も提起されます。しかし、それらは第二義的なものでしかありません。重要なことは、所有の廃止、自由を取ることが、怠け者をはびこらせ生産を停止させるものではないこと、アナキスト社会はすべての欲求を養い満たすことができることを、明らかにすることでした。

人が提起しうるであろう他のあらゆる異議は、アナキズム的環境は、そのメンバーである各自の中で、連帯と同胞への愛を発展させる、なぜなら人は、他人のために働きながら同時に自分のために働くことができるからだと、という考えに着想をえながら、容易に論破されましよう。

最も根拠があると思われる異議は次のものです。

もし、いかなる権威もはやないとすれば、もし犯罪者たちが暴力に訴えるのを止めさせるための憲兵への恐怖がないとすれば、われわれは、恐るべき割合で増加する汚行や犯罪を見る危険を犯すことにならないのか？

答えは簡単です。

われわれは、今日行なわれている犯罪を二つの主要な

おいて、知ることに貪欲な、聡明な数百万の人々が、自分を開花させることができない状態にある、と考えるのは苦しいことではないでしょうか？ おそらく、人類にとって有用な、高い価値を持つ人間にもなるであろう民衆の子たちが、小学校が彼らに教えこんだ、欠くことのできない若干の観念以外のものを決して知ることができない！

所有、そこに人間の幸福の敵があります。なぜなら、それは、不平等を生み、ついで、憎悪を、羨望を、血なまぐさい叛逆を生んでいるからです。

権威、それは所有の認証でしかありません。それは強奪のために力を用いるものです。

よろしい！ 労働は自然の要求なのですから、長官、あなたも、何びとも私が先にのべた最小限の努力の要求をまぬかれることはないであろうことを、私とともに認めて下さい。

(単純な労働者のように働くために喜んで政治の気苦勞から離れた政治家たちを、歴史が私たちに示しているほど、労働は自然なものです。そのよく知られた二つの例をあげてみます。ルイ十六世は鏡前作りにならずに、卑しい樵夫のように、自分の森の何本かの柏の木を自分で切るために、バカンスを利用しています。)

ですから長官、怠け者を守るためにいかなる法にも訴える必要がないということ、あなたもよくおわかり

分類にわけることができます。利害による犯罪と情念による犯罪です。

第一のものは、自ら姿を消しましょう。なぜなら、所有を廃止した環境においては、それらの犯罪の主因、所有の侵害がもはやなくなるからです。

第二のものについては、いかなる立法もそれらを妨げることではできません。それどころか、姦通をした妻を殺した夫を無罪にする現行法は、これらの犯罪の繰返しを助長するものでしかありません。

反対に、アナキズム的環境は、人類の道徳水準を高めるでしょう。人は、自分以外のものに身を与えた妻への、いかなる権利も自分が持っていないことを理解するでしょう。なぜなら、妻はその本性にしたがったにすぎないからです。

したがって、未来社会における犯罪は、次第に稀なものになり、完全に姿を消すでしょう。

長官、私はアナキスト社会についての私の理想を要約してみましよう。

自由社会の初めに生まれうる若干の行き過ぎよりも、人類の幸福にとって有害である、権威はもはやない。

現行の権威主義的な組織のかわりに、法と指導者を持たない、共感と親和力による個人の集団。

もはや私的所有はない。生産物は共有のものにする。

それぞれの必要にしたがっての各自の労働、それぞれの

必要によつての、つまり、意のままの、各自の消費。夫に妻を所有させ、妻に夫を所有させる、愛し合った二人に對して、彼らの生涯の終わりにいたるまで彼らが相互に結びついた瞬間を要求するエゴイスト的な、ブルジョア的な家族はもはやない。

本性は気まぐれなものである。それはつねに、新しい感興を要求する。それは、自由な愛を望む。それが、われわれが自由な結合を望む理由である。

決して見たことすらない人々を戦わせる、兄弟たちの間の憎悪はもはやなく、祖国ももはやない。

人種や肌色の差別のない、寛大な豊かな愛によつて、盲目的愛国主義者の、偏狭な貧弱な祖国への執着をおきかえること。

僧侶たち自身、地上の生活を享樂しているにもかかわらず、大衆を退化させ、大衆によりよい生活の希望を与えるために、僧侶たちによつてでっちあげられた、宗教はもはやない。

反對に、すべての人々を唯物論の自覚へと次第に導く研究に惹き寄せられる、各人の理解の範囲におかれる、科学の絶えざる發展がある。

科学が今日確認しはじめている、催眠現象の特別な研究。純粹に物理的な世界の諸事実を、不思議な超自然的な光の下に無知な人々に示している、ペテン師どもの仮面を剥ぐためのもの。

一言でいえば、人間の本性の自由な發展への、何らの

拘束もはやない。

肉体の、頭脳の、精神の、あらゆる能力の自由な開花。

そのような基礎を持つ社会が一べんに完全な調和に到達する、それを希望するほど私は樂觀的ではありません。しかし、私は、今日人間が耐え忍んでいる人工的な文明の影響から人間を引き離すには、善意と愛の状態である自然の状態へと人間を改めて導くには、二ないし三代で十分であるという、強い確信を持っております。

しかし、この理想に勝利をもたらすためには、堅固な基礎の上にアナキスト社会を据えつけるためには、破壊の仕事から始めなくてはなりません。古い時代おくれの機構を叩きこわさなくてはなりません。

それが、われわれがしていることです。

ブルジョアジーは、われわれは決してわれわれの目標に到達することはない、と主張しています。

未来が、ごく近い未来が、彼らにそれを教えることでしょう。

無政府思想万歳！

- 1 軍隊が労働者の群衆を撃ち、十人の死者をだした、一八九一年五月一日の一斉射撃を暗示している。

- 2 アンドレ・サルモン『黒いテロル』(一九五九年、ジャン・メトロン『ラヴァショールとアナキストたち』(一九六四年)による。
- 3 ジャン・メトロンの好意によつて再録する。ジャン・メトロン『フランスにおけるアナキズム運動史』(一八八六—一九一四)よりの抜萃。
- 4 Sebastian Faure (1858—1942) 初めイエズス会員によつて養育され、ついでゲード的な社会主義者となる。一八

- 5 八五年十月の選挙に立候補。一八八八年以来アナキストとなる。一八九五年に新聞『絶対自由主義者』を創刊した。理論家というよりも輝かしい演説者で講演者。一九〇四年に、ランブイエに、絶対自由主義的な学校「菓箱」を創立する。『アナキズム百科辞典』(四巻の監修の任に当たる。特に、『世界的な苦しみ』(一八九五年)の著者。ここに部分的な欠落がある。(ジャン・メトロン注)